

特42

880

美談中山誠忠録 全



明治二十年一月十日内務省交付 2257



○天保七年三月十日大御言家叙  
 公征身大御軍となり内大臣  
 かーり右邊の大御言源氏  
 の長者小補せしむる  
 同治六年十月五日あり  
 同治六年六月天下  
 孔謹人民  
 左路小石を  
 百老少の  
 老松の故人方  
 之を救ひてすれ共  
 力及つて内大臣

○白川の  
 松守  
 定修  
 経籍を  
 以て  
 本海

人より才を  
 玉ては  
 内務省

○川上高平  
 加定候人と  
 成り候候と  
 ちり候  
 と飾り  
 送礼と  
 意

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



天機と相俣ハ  
秋中古宮の依上系

由定依の付ハ  
あてね軍家  
ハアノ業トシテ  
モウモウ  
莫方の子を送るまは上上  
ハ巡見して何代の所へ引返  
ハ大内裏の遠望の物令  
ハ紫衣殿の若丸近の  
ハ栞の遠望せんとの  
ハ栞改殿の口は  
ハ不般命をせ  
ハ古と相俣定後の  
ハ



大くりさ  
愛のく本  
冥赤のく  
備く心  
ぬる  
物余す  
大り  
主人上  
くハ

ハ

毎朝の朝日  
 の裏に人  
 の風情を  
 教へて  
 深く地  
 の心  
 授け  
 必  
 運  
 及



先法  
 田





りるは天竺  
 のふりてお  
 軍家致上落  
 大機伺ひする  
 心算の勿論の表の共共  
 兼任の且は遠受の  
 空上は悉く検査仕の古来也



取上り上上は下  
 ありが別にお尋ねも  
 又殿下ハ  
 廻席遠彼  
 八古来也



殿下の中は遠受の音の返香  
 ありの定儀の古の遠香  
 空の上は悉く検査仕の古来也  
 心算の勿論の表の共共  
 兼任の且は遠受の  
 空上は悉く検査仕の古来也

どれた

松平越中守

お軍家へ  
まじりけり  
終に御儀の由にお成し願下は  
御儀の由に成るるも之も御  
之儀の上より成るるも之も御  
此儀の由に成るるも之も御  
此儀の由に成るるも之も御  
此儀の由に成るるも之も御



定儀の如く  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御

此儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御



松平伊豆守

水野出羽守

此儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御



此儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御  
御儀の由に成るるも之も御

ついで 廣橋中納

云正統町中

納を廣橋中

納を正統町中

公の隨仍

大長山

車西七

西国代右田

飯中書附

孫仙相西

女院西西の四五田七

○松平

越中守 上京

葺ゆの

忽ち火を

の燃らる

いふまを

勝るる丸

とぬき葺

なるるに

いふまを

上はれが

自覚在

せられ



種々遷り在り

とるが或日の上

煙房の山登

根小田田

とるをせ

られ中山

大刺去殿

小向のせぬい

那る初何分物

と初市の一く中山殿

ハツと平伏く少財去殿

も在るにがま膳小田七

のりあつと

いふ人ありに

色上まに在ぬい

丸と六何の突

用とるす物る

やと再び初あり

はれバ中山殿登ハ

火を燃えする何

五の如く火燒

齋教とる

源なるを

の標

世

に

末

の

は

と

を

の

に

は

は

は



つぎ 恐縮とて  
返さじが情々  
物衆の青蓮  
と顔象する  
ふ回羅杯に  
おくぬば  
ハ秋々の權  
武門不磨判  
られ終に天子  
有てなきが如く  
成行せぬ秋暮  
ありの物語



鷹司殿  
中山の  
侍んで云上  
しるは合  
般廻席の  
儀と付今目  
初この物語  
ありは云々  
物語は云々  
回羅杯も火と  
面表あり  
か  
く

あつたは  
おまの雲の殿  
下指り終しく  
奏向の次はよほ  
ぬいと想像バ  
先殿下ふひみ  
と云止而して後  
輿輪小徑曲座  
と決せんと中山殿ハ  
野向の邸へ来るは  
多不殿下も扱ハ廻  
席の事併あつた



越中守定信  
あつたは  
おまの雲の殿  
下指り終しく  
奏向の次はよほ  
ぬいと想像バ  
先殿下ふひみ  
と云止而して後  
輿輪小徑曲座  
と決せんと中山殿ハ  
野向の邸へ来るは  
多不殿下も扱ハ廻  
席の事併あつた  
あつたは  
おまの雲の殿  
下指り終しく  
奏向の次はよほ  
ぬいと想像バ  
先殿下ふひみ  
と云止而して後  
輿輪小徑曲座  
と決せんと中山殿ハ  
野向の邸へ来るは  
多不殿下も扱ハ廻  
席の事併あつた



越中守  
 武門小西王佐月小喜入と  
 物下と始め被書  
 幕威小座判せると運憾小

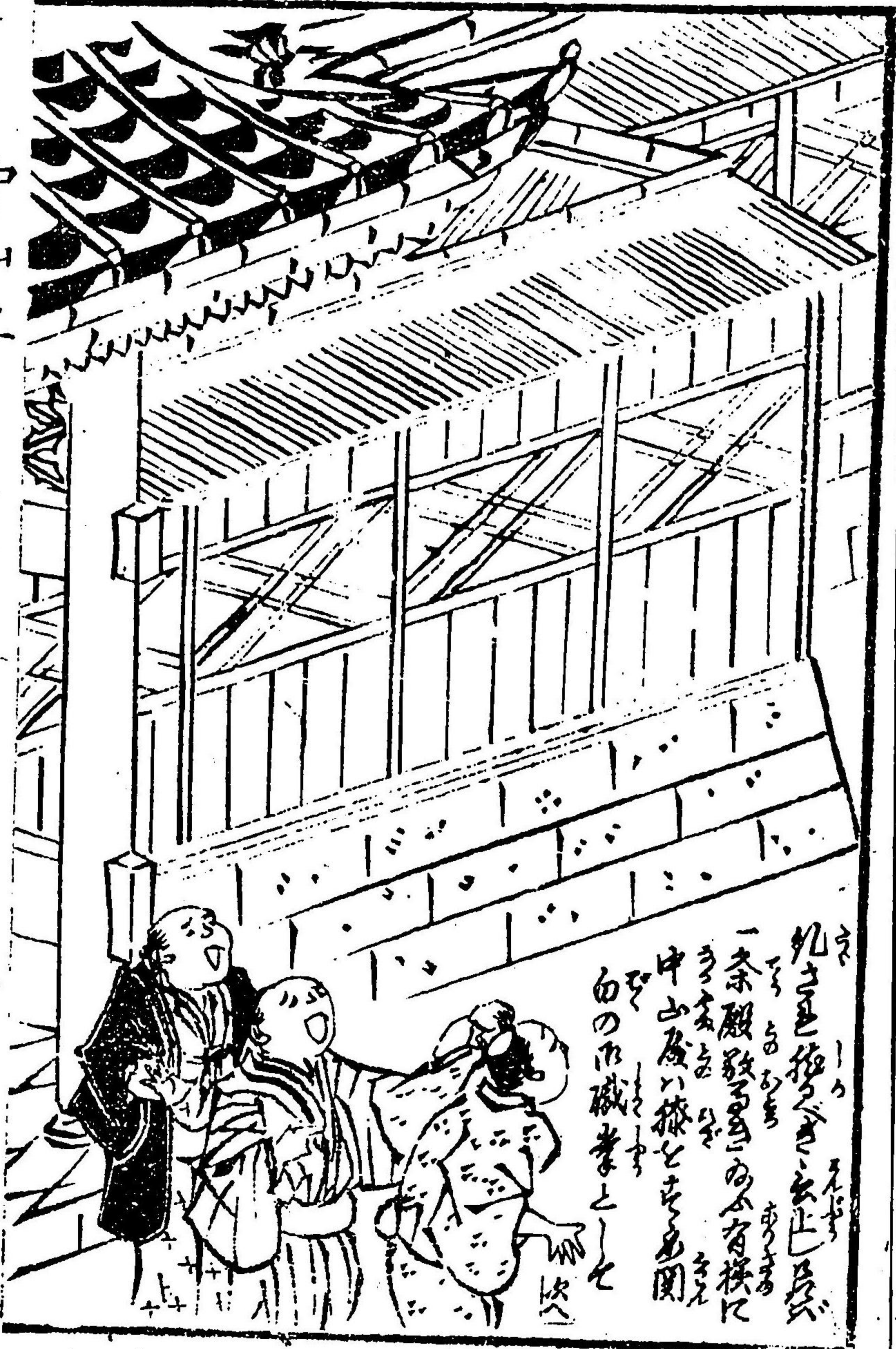
中山上

越中守  
 武門小西王佐月小喜入と  
 物下と始め被書  
 幕威小座判せると運憾小



内裏中道管  
 天明八年二月  
 武門小西王佐月小喜入と  
 物下と始め被書  
 幕威小座判せると運憾小

内裏中道管  
 天明八年二月  
 武門小西王佐月小喜入と  
 物下と始め被書  
 幕威小座判せると運憾小



此は色紙の巻止し及  
 一茶殿致すの公符候に  
 中山殿の候とて名聞  
 白の内蔵者として



秋中おのほほ依小  
 容易なるはれども  
 一茶殿へあられを田三  
 何事とせし入ら進み  
 中しあはしが退きあて  
 考が香に聞白の 昭軍家へ遠物の候と

奏言の件一由  
 一茶殿へあられを田三  
 何事とせし入ら進み  
 中しあはしが退きあて  
 考が香に聞白の 昭軍家へ遠物の候と

破一奏言と程はて  
 許と進みと候めし候  
 候浦小及候とて一云の  
 由参人あふまり候合

徳川家康より以来事は花々  
 遷延し今日のみくまにあり天肉  
 裏の遺言と延延致れの日を  
 へ何とぞ敵意あり  
 さい林武事より  
 数千年の今に例  
 ありと席を尊  
 とは道受ふ敵  
 今令く固め願下  
 一己の心くさ  
 敵意も宜しく  
 幕威小消滅せし  
 下



残表のふり身源三氏の  
 揚致と務む事  
 核の  
 政持の武門の  
 英  
 今今の系況  
 下

正の... 幕威小消滅せし  
 一己の心くさ  
 敵意も宜しく  
 幕威小消滅せし  
 下



幕威小消滅せし  
 下





一、西の所のついでに  
 西の所のついでに  
 右田一申さへま  
 何下あしはまをた  
 表ま小言むとお  
 せ一糸殿へ入  
 とはむれ甚  
 叔相

五首  
 五首石の  
 一糸殿へ  
 このあ  
 後之伴  
 此の人  
 百も  
 此の  
 首末止  
 方へを  
 必若申



諸卿  
 詮議之図

此由  
 申上へ  
 申上へ  
 此の糸巻  
 作儀の上六角  
 申上へ

思ひてんせ  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の  
 此の

中山一君  
 申して御軍家  
 のろ國々々々々  
 多程申されり  
 青岡系申し  
 さましさま  
 御ふくくハ  
 赤面しと  
 七死子生に  
 戸へ移りて  
 下の御一巻  
 心申し述べられ



中山大納言

▲世帯取崩し侍  
 申されゆく速り  
 赤中系に随う  
 りんと御決む  
 西の  
 田  
 せ  
 田  
 田  
 田

只長老の  
 方と書き  
 仁へるうろ  
 物も夏改  
 五年七月  
 中一条てん  
 下のー命心度ー  
 公ありて御内儀の  
 上の造営のりハ枝金  
 閑院の宮への上の血ハ  
 らせ入る宮に方上天皇と定  
 ゆき上りて又幸の物徳也▲

正親町中納言

下の  
 趣むき  
 御中  
 御入へく一け  
 公の御申さるハ  
 御く御言はれと  
 一安本に御言はれ  
 御式松方御言はれ

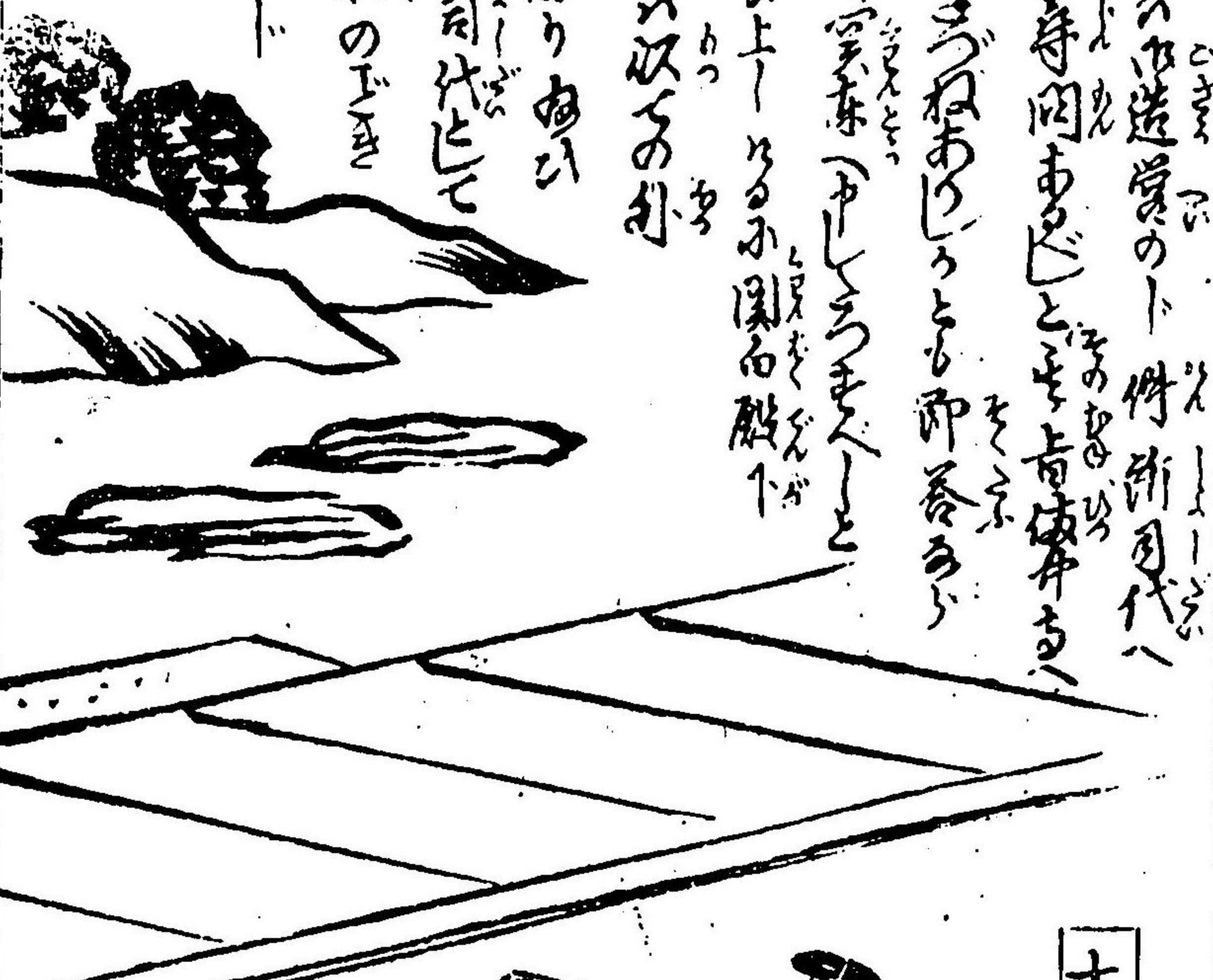
御式松方御言はれ

ついでしくおくりのきせ一茶  
 へんせし金とるえふうて  
 一茶とんえと中山と一  
 内城の中なる中山殿  
 されたる方今閑坐を英才と  
 ちへり中も勅使  
 定候あり  
 采醜の實  
 方上天皇と  
 ろくせぬへい  
 上席取崩の物候い  
 りと推考せざるもえい



▲返答のまじり  
 去ておくりのきせ  
 と天の事子に  
 ち寄りとる  
 身と知れ  
 ぬらぬと  
 へ容易の  
 るまの  
 悲ひと  
 契り一茶と

とるの道徳のト件所司代ハ  
 小舟の玉き  
 怒りあり  
 所司代にて  
 ぬらぬと  
 去上りたる小舟殿  
 ぬらぬと  
 ぬらぬと  
 ぬらぬと

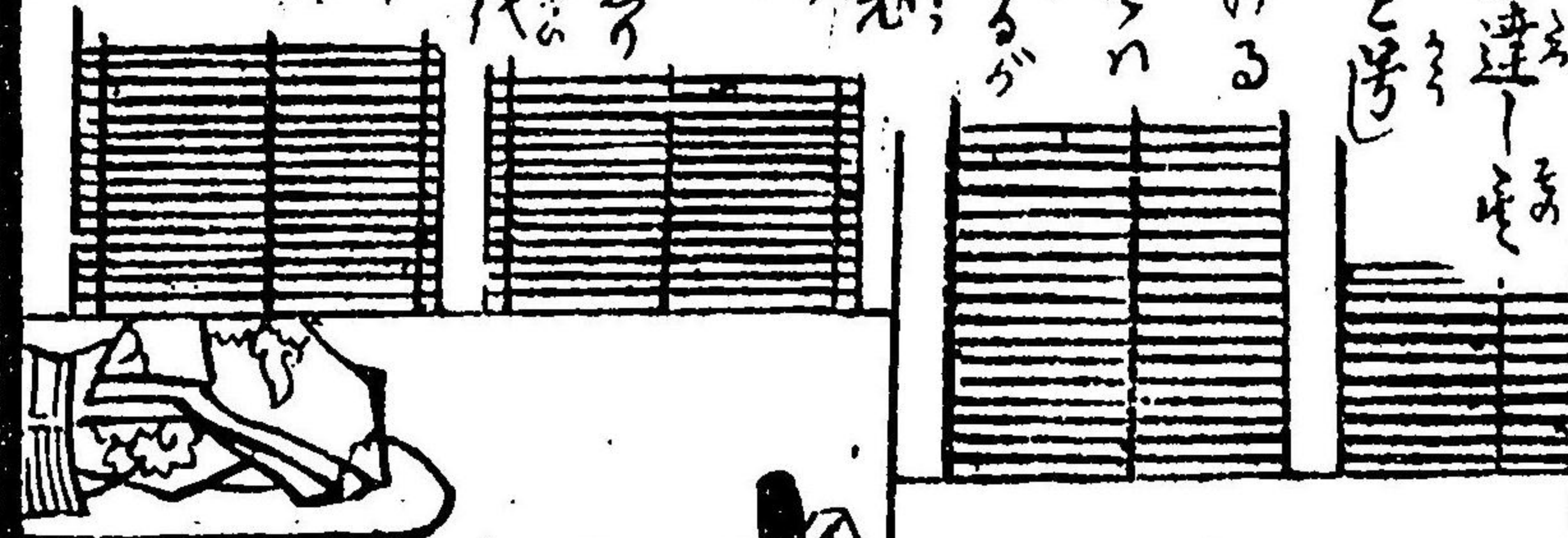


太田備中守

▲返答のまじり  
 去ておくりのきせ  
 と天の事子に  
 ち寄りとる  
 身と知れ  
 ぬらぬと  
 へ容易の  
 るまの  
 悲ひと  
 契り一茶と

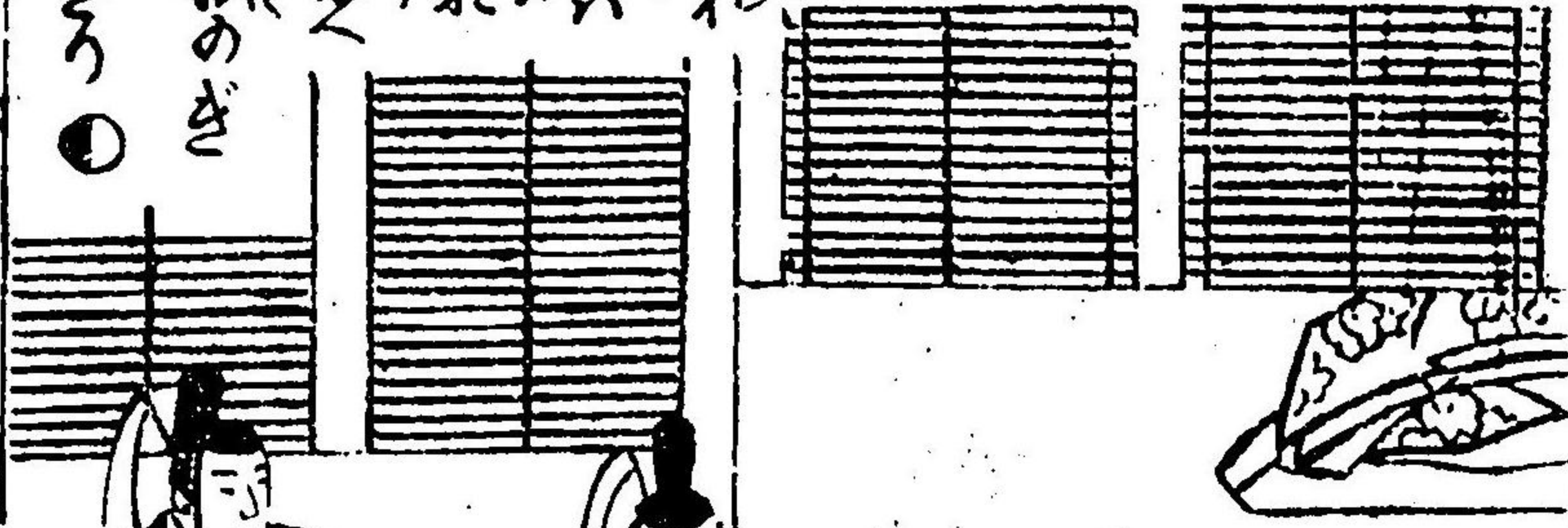


中山へ申上りて  
 後、病氣と云  
 引籠りける  
 園東申上り  
 出状は申上るが  
 吾や答者  
 お実洋  
 遙かへくさ  
 なるが何司代  
 方田徳中  
 吉徳丸  
 老爺への



之小儀を  
 口より何  
 徳田お徳申  
 系於何司代  
 命下され  
 又京一  
 西一の条用  
 白殿下中山  
 大納言の内  
 今般不司代  
 老田徳中申  
 上京の  
 松平徳中  
 引籠りて  
 せんといひ  
 松平伊豆守  
 之止め  
 中山大納言

向ふ  
 のう度  
 吉徳丸  
 出られが  
 老爺へ  
 きの上之  
 と許され  
 徳中古  
 老爺へ  
 とけ買  
 トト磯の  
 を申上る



上京の  
 大納言  
 老爺へ  
 お徳  
 申上  
 徳田  
 老爺へ  
 申上  
 上京の  
 老爺へ  
 申上  
 申上  
 申上  
 申上  
 申上  
 申上



の長策

のむつ

○ 裁中

もまよふ

せー密候

船の老も

のり

とそ...  
知ま...



つき

招軍家  
石の

丹の

いん

大いん石

△ 松

心

十月 辛

平

づの

系

のりま

五百

同く

の素内

と

龍眼

久

白

考

伊

中山下  
 今この世実父閑院の  
 一子親王への上天子の号  
 と名まうるるのりたると  
 中世ともいふ所ののち  
 とおしなる今の上の世  
 閑院の父への上天子の号  
 と名まうるるのりたると  
 二の條 貞のりたると  
 今く命は隠れ閑院の父へ  
 の上天子とすむる  
 閑院の父への上天子の号  
 と名まうるるのりたると



中山下  
 今この世実父閑院の  
 一子親王への上天子の号  
 と名まうるるのりたると  
 中世ともいふ所ののち  
 とおしなる今の上の世  
 閑院の父への上天子の号  
 と名まうるるのりたると  
 二の條 貞のりたると  
 今く命は隠れ閑院の父へ  
 の上天子とすむる  
 閑院の父への上天子の号  
 と名まうるるのりたると

中山大納言  
 実父一橋氏  
 大納言と稱え  
 人懐より  
 名を聞か  
 孝なまれと  
 大いありたると  
 白きりの天中  
 納るへ程に  
 てまうる如すり  
 小雀く時へ



中山大納言  
 実父一橋氏  
 大納言と稱え  
 人懐より  
 名を聞か  
 孝なまれと  
 大いありたると  
 白きりの天中  
 納るへ程に  
 てまうる如すり  
 小雀く時へ

正親町中納言  
中山大納言

中山大納言  
中山大納言



中山大納言  
中山大納言

松平越中守

松平越中守



松平越中守  
中山大納言

中山大納言元親卿

中山大納言元親卿

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言



中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

中山大納言

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信



松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

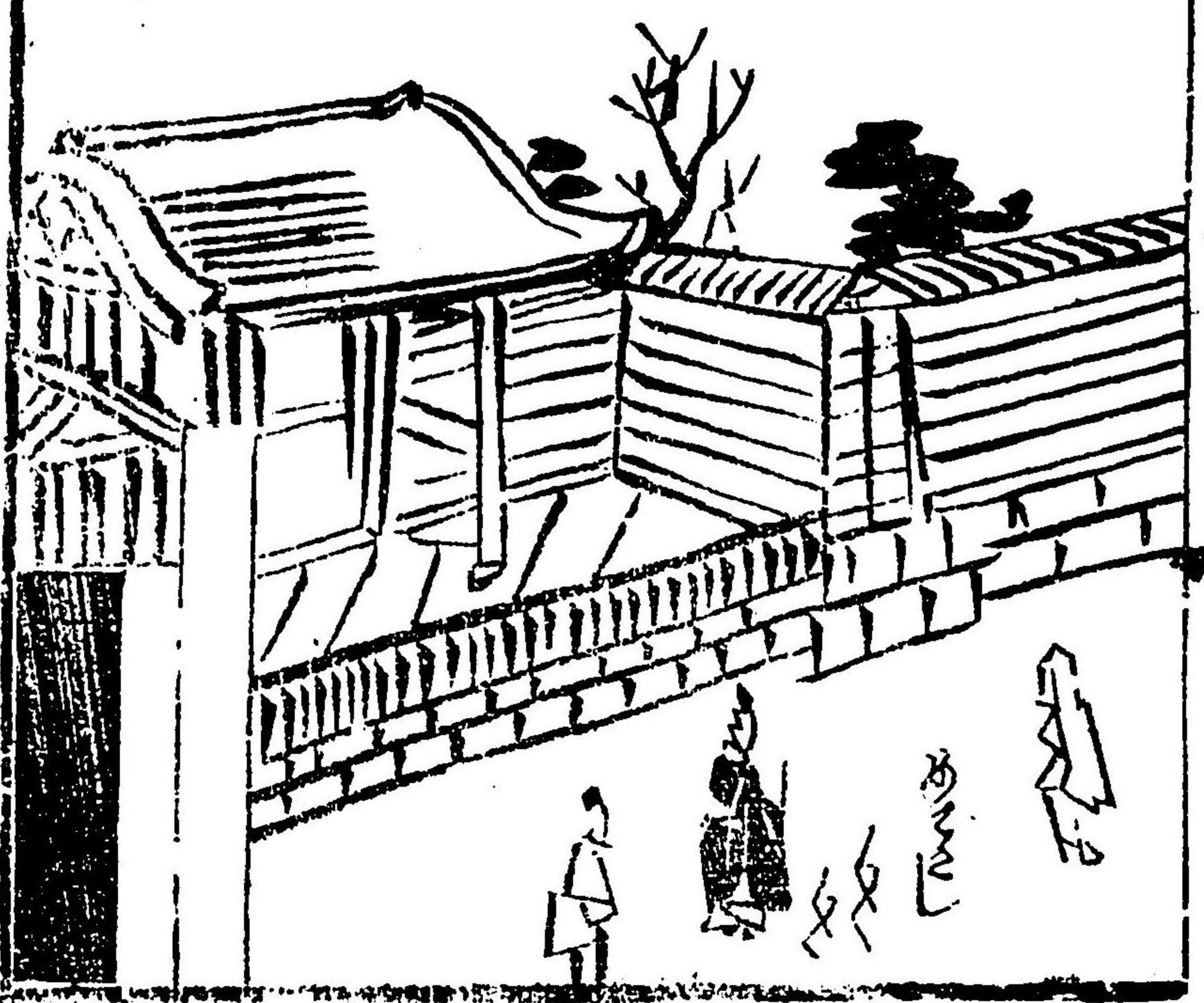
松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

松平越中守定信

つぎ 役多しれりふのくまの  
 元々外さきなる又中山屋ハ  
 田生一ふ存り羽生田解職  
 區にれハ招延り由際一  
 ませぬひるそと大船長に  
 何しぬふ実あるゆへに  
 今之位の長長に考へ  
 此後少納小使一にれなる  
 能く一く一に川  
 床茶と等たえふより  
 公武の繁華と表へ  
 今くぬるのゆへに



# 賣 捌 所

日本橋區小傳町三丁目	長谷川園吉
全 馬喰町二丁目	豊田屋長吉
全 横山町三丁目	三好屋
全 松島町	大西庄之助
全 通り三丁目	開成堂
全 浅草藏前	深川屋金之助
全 壽町	山本常次郎

御明治十九年  
 五月廿七日  
 編輯者  
 出版人

深川仲太五町廿六番地  
 山口亀吉

